

小西甚一著「古文の読解」筑摩書房 2010年2月10日刊を読む

「不易」と「流行」

1. (1)日本文芸の世界で、二人のすぐれた作者がぶつかりあい、史上に残る傑作を生み出したのは、大伴旅人と山上憶良とか、紫式部と清少納言とか、心敬と宗祇とか、森鷗外と夏目漱石とか、いろいろあるが、西鶴、芭蕉、近松の三人は稀な例だろう。
(2)だいたい同じ時代に活躍した三人の代表的な作家たちが、申し合わせたように新しい境地へと進み、どしどしすぐれた芸術を創作したエネルギッシュな活動ぶりには驚嘆のほかないが、
(3)その共通のエネルギーは、いったいどこから出てきたのか。豊臣秀吉という男。何しろすごい馬力があった。
2. (1)かれの時代には、すべてが新しい生命にあふれていた。狩野山楽なんかの豪華な画を見るがよろしい。
(2)また、能衣裳といえば、渋く深みのある色あいのものだと思いこんでいる人たちは、観世宗家などに蔵される桃山時代の能衣裳を見れば、キモをつぶすにちがいない。
(3)ピンク色の地に夜具のような大模様を織り出したのがある。大胆きわまるデザインで、20世紀後半の進歩的女性がドレスに仕立てたら、たぶん絶讃されることうけあいだろうと思われる。
(4)そうした表現力のたくましさを支えたのは、時代ぜんたいの活気にあふれた精神だったろう。
(5)もちろん、そのような時代のことだから、悪質な手段で巨富をせしめた新興財力者も多かったが、とにかく、よかれあしかれ現在の状態に満足せず、もう一步前進しようとする気迫に充ちていた。
(6)そのなかで、みごとな芸術が花を咲かせたのである。泥池に咲く蓮のように――。
3. (1)芭蕉の言う「流行」は、そういった動的な精神に裏づけられている。
(2)『三冊子』の説明によると、芸術の世界で真剣に創作しようとする者は、どうしても現在の境地にとまっておれず、しぜんに一歩ふみ出し、新しいものへと進む。
(3)それが「流行」にほかならない――といわれる。
(4)「あら、その色、今年の流行ね。」など言うときの「流行」とは同じでない。
(5)しかし、よく考えると、いまの状態に満足できず、もうひとつ新しいものを求めて前進しようという意識は、芭蕉の言う「流行」もアン・ノン族の「今年の流行ね。」も共通である。
(6)違うのは、真剣な創作態度でギリギリ追いつめた結果の新しみか、なんとなく古いものを好かないといった程度の移り気から生まれた新しみか、の差だといえる。
(7)これに対して、芭蕉の言う「不易」は、時間の流れによって価値の動かない表現の性質を意味する。
(8)つまり、柿本人麻呂の名作は、鎌倉時代の将軍実朝をも、江戸時代の学者賀茂真淵をも、明

治時代の新聞記者正岡子規をも、また現在の少ないからぬ人たちをも、ひとしく感動させる。
(9)このように時代をこえて人の心をうつ作品が、すなわち「不易」なのである。

4. (1)ところで、簡単に考えると、不易と流行は、反対のように見えやすい。
- (2)一時的な流行の作品と、いつまでも変わらず存在する不易の作品とは、火と水ぐらいの違いがありそうに思われる。
- (3)しかし、芭蕉によれば、両者はもともと同じ源から生まれるものだという。
- (4)つまり、真剣な創作態度から、やむにやまれず新しい世界へふみ出すところに流行の作品が生まれるが、何分にも未知の境へ進むのだから、きっと成功するとは限らない。
- (5)一時的にもてはやされても、結局は失敗し消えてゆく作品がむしろ多いだろう。
- (6)が、なかには、つよく人の心をうち、後の世までも残る作品が、ときどき出る。
- (7)それが不易の作品なのである。
- (8)すなわち、不易の作品も、生まれた瞬間は流行の作品だったのである。
- (9)別の面から言いなおすと、不易の作品を生み出そうと思って、人麻呂や定家の歌をまねたところで、けっして不易の作品は生まれるものではない。
- (10)不易の作品を生むためには、ほんとうの流行に全身身を打ちこまなくてはならない。流行に深まるほか、不易に到達する道はない――。
- (11)これが芭蕉の有名な不易流行説である。
- (12)すばらしい論である。
- (13)これだけの芸術論は、西洋にもザラにはない。
- (14)しかも、芭蕉は、それを理論として頭からひねり出したのではなく、身をもって創作の世界で実践し、実践のうちからつかみとったことを述べたにすぎない。
- (15)芭蕉がどんなに「流行」へ激しく体あたりしていったか、すぐのみこめよう。
- (16)そうして、その「流行」のうちから、わたくしたちを今なお深く感動させずにはおかない幾多の不易なる句が生まれたのである。

P151 ~ 153

<コメント>

古文参考書の「古典」、小西甚一先生の「古文の読解」。NHKの大河ドラマ「光る君へ」で平安時代や「日本の古典」に興味をお持ちになった大人の皆様にも絶好の参考書。

2024年8月20日(火)

林 明 夫